知床の窓から見えるもの

2014 年 9 月 2 日（火曜日）

「師長の看護学校訪問デビュー戦」

診療所オープン時は、11 名の看護師でスタートしました。現在は、地元をはじめ、札幌や遠くは長野県から就職していただき、16 名の看護師集団に育っています。

少し前の新聞に「消滅都市」の記事が掲載されたのを記憶されている方もいらっしゃると思いますが、「消滅」と言う響きは少し寂しいように思いました。「人口が減っても、いいじゃない。減っても暮らしていける町を作ればいいじゃない」と私は思います。未来の言葉を使うなら「超コンパクトシティ」です。

さて、看護師集団に支えられながら、日々師長業務をおこなっておりますが、今年は「母校訪問」を計画しました。これからは、人口は減っていく一方です。この道東地方は、道内の中でも医療職の比率は低く人材確保は、大きな大きな課題です。

“卒業生の〇〇さんが、自分の地元から遠く離れたこの羅臼町で僻地医療を頑張っています”

“看護師として、地域の医療資源となり医療を支えてくれています”

“すばらしい看護師として育てて頂き、ありがとうございます”

・・といった看護師長からのメッセージをお伝えしたく・・。

また、母校に就職相談に来られた卒業生さんに、ぜひ羅臼の医療の紹介をして頂きたく、求人パンフレットの説明も含めた訪問です。

自分の学生時代を振り返ると、あまり優秀な学生ではなかったため、学校の先生の前だと緊張します。

それは、いくつになっても同じ心境でした。しかし、どの学校の先生もお忙しいところお時間をとって頂き、お話を聞いて頂きありがたく思いました。

また、先生達が抱える問題や課題を伺っていくと、「実習先の病院の確保が難しい」「看護教員の人材不足」といった共通の悩みがありました。やはり、「人材不足」の問題です。

大きな都市で、たくさんの医療機関があるにもかかわらず、実習先が確保できず、東京まで行かなければ・・など、何か社会の歯車があっていない、どこで合わせばいいのだろう・・と、お話を伺いながら思いました。

看護職は、優しさや励ましや時には厳しさをもって相手に接し、より元気に、より健やかに、より穏やかに、そして安らかになれるように２人３脚で進むお仕事です。

今は、チーム医療ですから、３人４脚・４人５脚と広がりも感じとれます。

看護師ひとりひとりが、ばらばらに動いていては、これからの人材不足の時代は乗り切ることは難しいと考えます。看護師集団として、手をさしのべる、足を運ぶ、知恵を出し合いながら、患者さんやご家族を支える、それが、その地域を支えていくことに繋がります。

また、それがひとりの看護師が働き続けられることに繋がるのでは・・とも感じ、このデビュー戦で、足を運ぶことの大切さを学びました。

＊平成２６年度　師長のデビュー戦　訪問先＊

- 北海道看護協会ナースセンター
- ＪＩＣＡ北海道
- 北海道保健看護大学校
- 北海道看護専門学校
- 駒沢看護保育福祉専門学校
- 北海道美唄聖華高等学校
- 札幌医学技術福祉歯科専門学校
- 北海道総合政策部地域づくり支援地域政策課　移住交流グループ

しかしながら、今回お世話になったカーナビは、東西南北を惑わすもので、アナログ人間としては、やっぱり愛用の地図が最高です。

また、北海道の軽井沢？超避暑地の羅臼で涼んでいると、道央は真夏の暑さでした（暑っ！）

この度の訪問でお世話になりました看護学校の先生をはじめ、看護協会・ＪＩＣＡ北海道・北海道庁の移住交流グループの皆さまには、厚く御礼申し上げます。